上咽頭結核の1症例

井野 千代徳*・岸本 素子*・田辺 正博**

Epipharyngeal Tuberculosis; a Case Report

Chiyonori Ino and Motoko Kishimoto

(Kochi City Hospital)

Masahiro Tanabe

(Kochi Medical School)

A 40-year-old female complained of swelling of the neck. Malignant lymphoma or cancer of the larynx was suspected. Posterior rhinoscopy revealed a granular mass with a pale surface in the nasopharynx. Histological examination of a biopsy specimen revealed tuberculous changes.

Treatment with antituberculosis agents, S.M., I.N.A., and R.F.P. greatly reduced the swelling.

は じ め に

結核性疾患は、すぐれた抗結核剤の開発等により耳鼻咽喉科領域においても著しく減少してきたが、依然として看過できない疾患の1つである。我々は、最近、比較的稀な上咽頭結核の1症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

患 者：40才，女性

主 訴：両側頸部の無痛性腫脹

既往歴：21才の時に、肺結核で約1年間治療を受けた。

現病歴：昭和56年8月頃より左頸部の無痛性腫脹に気付いていたが放置していた。腫脹が徐々に増大し、加えて右側頸部にも腫脹が現れたため昭和57年7月23日当院放射線科を受診した。Malignant lymphoma 或いは耳鼻咽喉科領域より腫瘍の頸部転移が疑われ、当科に紹介された。

初診時局所所見：左側胸鎖乳突筋に沿って母指頭大から小指頭大の腫瘍が数個認められ（図1），下方にては，腫瘍は互いに癒着し可動性がやや制限されていた。右頸部にも，小指頭大の腫瘍を2個認めた（図2）。上咽頭内視鏡検査で，図3に示す様な，表面やや平滑で蒼白な腫瘍が認められた。中咽頭，下咽頭，喉頭には特記する所見を認めなかった。

臨床検査成績：血液像，生化学検査には異常を認めなかったが，赤沈は1時間値40mm，2時間値98mmと亢進を示した。又ツベルクリン反応

* 高知市民病院耳鼻咽喉科

**高知医科大学耳鼻咽喉科学教室

図 1 左側胸鎖乳突筋に沿っての腫瘍

図 2 右側胸鎖乳突筋に沿っての腫瘍

図 3 上咽頭に見られた表面やや平滑で蒼白な腫瘍

は $19 \times 20 / 35 \times 39$ と強陽性を示した。

胸部レントゲン所見：左肺尖部に胸膜の若干の肥厚を認めるのみで活動性肺結核を疑わせる所見はなかった（図 4）。

病理組織所見：上咽頭試切により得た切片の組織像を図 5 に示す。類上皮細胞，結節形成，

図 4 初診時の胸部レントゲン
（活動性の病変を認めず）

図 5 上咽頭腫瘍の試切より得られた標本

giant cell 等が見られ結核病変と診断された。左頸部腫瘤の試切も行ったが、同様の組織像が得られた。

治療は、SM., INA., REP. の三者併用療法

で行った。10ヶ月が過ぎた現在なお経過観察中であるが、上咽頭腫瘤は、治療開始後およそ6ヶ月にて消失し、頸部腫瘤は、著しい軟化縮小を認めている。

考 察

結核化学療法剤の出現前に比して、結核患者が著しく減少したことは、論をまたない。北ら¹⁾によると昭和55年では、昭和40年に比して結核患者総数は、約1/3に、又新登録者数では、約1/4に減少したと述べている。耳鼻科領域においても同様に結核患者の減少は顕著で、咽喉頭結核を例にとれば、野垣²⁾は、昭和19年より昭和46年までの27年間の統計をとり、昭和23年をピークとして急激な減少を示し、昭和30年代に至っては、皆無か、極めて少数に止まると報告している。しかし、昭和40年以降は、毎年数名の咽頭結核患者を散見するので日常診察にあたり注意を要すると述べている。

上咽頭結核は、往時においても稀な疾患で現在までの報告は、表1に示した如く筆者らの症例を含めて29例である。1961年の Savić³⁾によれば、その10年間にこの部の結核は、4例と報告されている。局所の所見は、結節および腫瘤を形成するものと、白苔を伴う潰瘍を形成するものとに大別される。浅井⁴⁾によれば、前者は、咽頭天蓋に認められることが多く、後者は、咽頭天蓋、耳管隆起、咽頭陥凹に認められることが多いと言う。浅井の22例を除く7症例のうち、潰瘍形成を認めたものは、北らの1症例にすぎず、他は全て腫瘤形成を主病変としている。この事実は、咽頭結核における肉芽性病

変の著明な増加と潰瘍性病変の減少と性質を同じくするものと考える。肉芽病変の増加の原因について、兵ら⁵⁾は、ストレプトマイシンへの菌の耐性増加と不適切な薬剤の投与にあるとしている。又、豊田⁶⁾も結核菌自体の変遷を理由にあげている。一方、長沢ら⁷⁾は、高齢者の結核は、繊維性乾酪型が多い為としている。

上咽頭結核の発生は、原発性と続発性に分けられるが、原発性に関して Martinson⁸⁾が報告しているが、その発生機序として、アデノイドに潜伏していた結核菌が、何らかの原因により臨床化した可能性、結核菌の吸入による感染の可能性、更には、不明の病巣からの血行性感染の可能性をあげている。しかしながら多くは、肺結核による二次的なものでその機序は、黒住⁹⁾、Chodosh¹⁰⁾は、管内性感染によると述べている。我々の症例は、21才の時に肺結核に罹患しているが、初診時には、レントゲンで活動性肺病変を認めなかった。Paul¹¹⁾ Chodosh¹⁰⁾によれば、全く臨床症状を呈さない扁桃結核の存在を、又栗田口¹²⁾によると、肺結核のあと扁桃や周囲のリンパ組織に結核菌が執拗に潜在することを報告している。我々の経験した症例でも肺結核が治癒した後も結核菌が、上咽頭のリンパ組織に潜在していた可能性を考えている。

自覚症状は、全くないか、軽微なことが多いが、咽頭異物感、搔痒感、又 Chodosh¹⁰⁾によれば、乾燥感等の上咽頭炎の症状を呈することもある。しかし、耳管咽頭口に影響を及ぼすと滲出性中耳炎、或いは、経耳管的に結核性中耳炎をも併発する可能性がある。平出¹⁴⁾の報告の中には、上咽頭悪性腫瘍の如く外転神経麻痺を起した症例もある。この様な症状を伴う場合、

表1 上咽頭結核の本邦報告例

報告者名	症例数	報告年
浅井良三	22例	1941
黒住静之	1例	1976
平出文久	3例	1977
北真行	2例	1982
筆者	1例	1983

我々耳鼻科医の関心は上咽頭に向けられるが、そうでない場合、診断はきわめて困難である。本症例では、頸部リンパ節腫脹を伴ったため上咽頭の病変に気付いた。平出¹³⁾は、咽頭結核は、他の耳鼻科領域の結核に比べて頸部リンパ節腫脹をきたすことが多いことを報告している。ちなみに、浅井の22例を除く、7症例のうち、北ら¹⁾の1症例と黒住⁹⁾の1症例を除く5症例には、頸部リンパ節腫脹を認めている。又Trenes¹⁴⁾の報告の中には本症例の如く、両側

頸部のリンパ節腫脹を伴った症例が含まれている。

治療は、化学療法剤によるが、頸部リンパ節に対して、平出¹³⁾は、難治性の場合、手術的に摘出することを勧めている。本症例も約10ヶ月の経過を見ているが、上咽頭腫瘍は、消失しているものの頸部リンパ節腫脹は、依然として一部残存している。経過を見て手術的操作も考慮している。

ま と め

両側頸部腫脹を主訴とする40才の女性。上咽頭に表面やや平滑で蒼白な腫瘍を認めた。試切により結核との診断を得た。

治療は SM., INA., RFP. にて行った。

本文は、昭和58年の第3回日耳鼻高知地方部会にて口演された。

稿を終るに臨み、関西医科大学耳鼻咽喉科教授熊沢忠躬先生の御校閲に深謝いたします。

文 献

- 1) 北 真行, 森 弘: 最近経験した上咽頭結核治療例. 耳鼻臨床 75: 1999~2006, 1982.
- 2) 野垣俊幸: 最近における咽喉頭結核の様相, 気食会報 23: 185~190.
- 3) Savić: 8) より引用
- 4) 浅井良三: 鼻咽腔結核の臨床所見. 結核彙報 4: 234, 1941.
- 5) 兵 昇, 板橋 広, 佐藤三郎, 村越智子: 最近の咽頭結核症, 耳喉 30: 271~274, 1958.
- 6) 豊田文一: 喉頭結核の推移. 最新医学 20: 2347~2348, 1972.
- 7) 長沢 潤, 他: 老人肺結核の臨床と経過. 日胸 26: 1~9, 1967.
- 8) F.D. Martinson: Primary tubaculosis of the nasopharynx in a nigerian. J Laryng 81: 229~233, 1967.
- 9) 黒住静之, 平田賢三, 杉本嘉郎: 上咽頭結核の1症例. 耳喉科 48: 681~684, 1976.
- 10) Chodosh P.L., Willis W.: Tuberculosis of the upper respiratory tract. Laryngoscope 80: 679~696, 1972.
- 11) Paul Wurtele: Ulcerative tuberculosis tonsillitis. Otolaryngology 11: 279~282, 1982.
- 12) 栗田口省吾, 川畑武裕, 渡辺貴和子, 斉藤久樹: 最近の咽喉頭結核. 耳喉科 41: 679~683, 1969.
- 13) 平出文久: 最近の耳鼻科領域の結核症. 耳喉科 49: 973~984, 1977.
- 14) Trenis J.W.: Tuberculosis of the nasopharynx positive spotun with a voentgenophically ageter chest. American J.M.S. 199: 321~318, 1940.

原稿到着: 昭和58年10月3日

別刷請求先: 井野千代徳

〒780 高知市丸の内1の7の45

高知市民病院耳鼻咽喉科